聖書宣教会通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No.185
2021.9.1

巻頭言
Greeting

× 谷口 峰夫
Mineo Taniguchi
聖書宣教会 評議員
（伊勢バプテスト教会牧師）

Profile

1966年石川県生まれ。聖書宣教会卒業後、2008年より日本バプテスト宣教団・伊勢バプテスト教会牧師、現在、日本バプテスト宣教団実行委員長。

「変わることのない目標」

この命令が目指す目標は、きよい心と健全な良心と偽りのない信仰から生まれる愛です。
（テモテへの手紙第一１章５節）

2020東京オリンピック・パラリンピックについては、2021年初春から、開催、中止、延期などの意見が飛び交ってきました。2020東京大会の開催に関する一連の出来事から感じたことの一つは、人の計画は思ったようには実現しないということです。もう一つは、人は変わりやすいということです。大会の開催の理念・意義について、政府は当初「復興五輪」を掲げました。それがCOVID－19の感染拡大に伴って、「人類が新型ウイルスに打ち勝った証」としての五輪が加わり、やがて「新型コロナという大きな困難に対して、世界が一つになり難局を乗り越える」というものに変化していきました。感染拡大という状況の変化の中で、否応なく移り変わらざるを得ませんでした。

これらのことから考えさせられたことは、キリスト者にとって、時代の移り変わりによって、神のみことばの意義・重要性は変化するかということです。もちろん旧約・新約聖書が記された時代と現代とでは、また私たちの後の世代とでは、様々なことが違います。しかし、新旧約聖書が、私たちにとって信仰と実践の唯一、完全な規範であるということは、今も後も変わることはありません。

この手紙で、パウロは、テモテに対してエペソにとどまるように指示し、エペソのキリスト者たちが、間違った教えを説かないよう命じるようにと記しています。これは、時代と国を超えて、現代でも同じように大切な命令です。パウロは、「神に委ねられた信仰の務めを実現させる」（１：４）ことが重要であると認識していました。この命令が目指すのは、私たちに注がれているキリストの愛を、私たちが表せる者となるということです。私たちが神の愛を表すためには、きよい心・健全な良心・偽りのない信仰を養う必要があるのです。

時代が移り変わっても、神から委ねられた信仰の務めを実現するために、私たちが主にあって教えられ、整えられることは極めて重要です。私たちは終わりの時代を生きているからこそ、主のみことばの約束をしっかりと握って歩まなければなりません。主に従う働き人が、あらゆる困難な状況を通ったとしても、地の塩・世の光として主に仕えることができるように、十分な訓練を受けて主が備えておられる場へと遣わされる必要があります。この学舎での研修生活を通して、一人ひとりに委ねられた務めの実現のために、きよい心と健全な良心と偽りのない信仰が豊かに養われることを願っています。

No.185 Topics

- p03 学びの窓
- p04、05 キャラバン伝道報告
- p06 夏期研修講座
- p07 教会音楽夏期講習会

二日分のパン、三年分の収穫

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

安息日を守って、これを聖なるものとせよ。
（申命記 5:12）

行き届いた、万全の恵み

荒野では二日分のパン（出エ 16:29）を備えて安息日の恵みを教え、その訓練をしてくださった神は、約束の地では安息年のために三年分の収穫（レビ 25:21）を約束しました。全く行き届いた恵みをもって民を導かれる神です。感謝し、信頼と聴従を大切にしましょう。仕事の手を止めて聞く主の御声、静かな心で深める主との交わりはキリスト者の生命線です。

学舎の働きのために主が備えてくださる幸いもいつも万全です。感謝し御名をあがめます。

6 月の「教会音楽のひととき」はオンラインならではのプログラムを提供して大変好評をいただき、視聴回数は 1600 を越えました。7 月の「夏期研修講座」、8 月の「教会音楽夏期講習会」ともにオンラインの幸いな学びの時となりました。別頁の報告と証しをご覧ください。教師会では今後の継続教育や拡大教育の可能性について思案し、検討を重ねています。

キャラバン伝道は、コロナ禍の状況に応じて柔軟に対応できるように2チームは学舎からの通いで実施、1チームは奈良に遣わされました。これも別頁をご覧ください。ほかにも研修生たちは奉仕教会や母教会また各地で、この時期ならではの奉仕と訓練にあずかり、充実したときを過ごしたはずです。秋の日々に聞ける証しを楽しみにしています。

そして、ここから

8 月末の特別講義に始まり、通常授業が再開すると、前期末の 10 月初旬まではあっという間です。卒業予定者は卒論・卒研の夏の研究の成果をまとめ、進路の導きについて祈りを深めます。各学年の学びも期末に向けてスパートがかかります。

秋期調整期間の恒例のリトリートは、今年も外部に宿泊する計画はできず、学舎での特別な機会となるよう計画が進行中です。11 月のオープンデイと賛美礼拝も、今年もオンラインで計画しています。一定の方々は学舎にお迎えできるように備えますので、詳細はウエブサイトをご確認ください。

お祈りください、お祈りします

10 月には来年度の募集が始まります。働き人の必要はますます多大です。召しの器たちが主に応答して立てるように祈りましょう。例えば経済的な必要が直接献身を阻むことがないように、主と主の教会に信頼して踏み出せるように。この学舎にも主のご計画の通りに研修生が加えられるようにお祈りください。

続けて教職員の次代の必要のためにどうぞお祈りください。専任教師が加えられるように、オンライン全盛の時代に求められる助け手、働き手が起こされるように。

諸教会でも、コロナ禍の推移をにらみながら秋から冬の諸活動を展望しておられることでしょう。多様な意見や懸念が交錯する中、万全を備えてくださる主への信頼を確かめながら、一致のうちにことが進みますようにお祈りいたします。教会のすべての必要を、教会の主ご自身が大胆に満たしてくださいますように。

祈りの交流を主に感謝します。今後ともよろしくお願いいたします。

File No.018

「こうして、教会は」

三浦 譲
Yuzuru Miura
聖書神学舎 教師

「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を得た。主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。」(使徒 9:31)。

このみことばは使徒の働きにおける要約表現の一つだと思われますが、私の印象に残る一節です。いくつかのことが心に留まります。

第一に、「ユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地にわたり」と言われているのに、この節で「教会」を表すギリシア語のエクレシアは単数だということです。このような場合は、ふつうはエクレシアが複数で表され、「諸教会」と訳されます。パウロ書簡(ガラテヤ 1:22; 1 テサロニケ 2:14)でもそうですし、使徒の働きにおいても 15 章 41 節と 16 章 5 節では複数形が用いられます。ゆえに西方写本やビザンティン写本などでは複数形の写本が存在しますが、ここはやはり単数です(B. Metzger, A Textual Commentary on the Greek New Testament, 322-323)。

第二に、日本語訳ではこの節の最後は「信者の数が増えていった」(新改訳 2017)と訳されることです。日本語訳が新改訳第3版から変わらなかった箇所ですし、新共同訳から協会共同訳においても「信者の数が増えていった」と変更されなかったところです。しかし本当は、ここの主語は単数のエクレシアです。英訳がそれをよく表しています(“So the church throughout all Judea and Galilee and Samaria had peace and was being built up. And walking in the fear of the Lord and in the comfort of the Holy Spirit, it multiplied” [ESV])。もちろん日本語訳者たちはそれに気づきながらも、「信者の数が増えていった」と訳すのでしょう。確かにここで使われているプレースノーというギリシア語は、「信者」が増える時に用いられます(使徒 6:1, 7; 7:17)。また、使徒の働きの書における他の要約表現(6:7; 16:8)でも「信者の数が増えていった」ということが語られています。しかしこの場合の「教会」が単数であることを考慮する時、ここを「教会が増え広がっていった」と訳せないものか(「教会が増えていった」であると、教会の数が増えていったという意味になってしまう)と未だに考えているところです。

第三に、これはなかなか訳には反映されないことですが、9 章 31 節ではギリシア語のメン「一方」が使われ、次節の 32 節ではギリシア語のデ「他方」が使われていることです。ということは、31 節はそれまで語られてきたことの要約を表しているだけではなくて、32 節以降で語られることにもつながっていくということです。

この「教会」という単数の形は、「使徒の働き」が物語る一つの方向性と深く関わっているのでしょうか。聖霊がユダヤ人(2 章)、サマリア人(8 章)、異邦人(10 章)へと与えられ、そこではペテロが用いられる。また、後にパウロも単に異邦人教会を建て上げるだけでなく、ユダヤ人教会と異邦人教会が一つになることのために働く。まだまだ明確な答えは出ませんが、そのようなこととの関連を思案中です。最後にコリント人への手紙第一から。

「私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷 も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。」(12:13)。

03 キャラバン伝道報告
Caravan Reports

「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい。」
（ローマ人への手紙 12 章 15 節）

今年は、コロナ禍で活動が制限されている教会に、キリストのからだとしての、愛の交わりを通してお仕えしたいという思いで、準備を進めてまいりました。感謝なことに、それぞれのチームが、変わらない主のお働きを見てくることができました。みなさまのお祈りと、今年もキャラバン伝道を守り導いてくださった主に感謝いたします。

菅野 雪
Yuki Kanno
2021年度 キャラバン実行委員長

❷ 日本福音自由教会協議会 奈良福音自由教会（奈良県）

7月12日(月)–19日(月)　奥田智子、田中甲子郎、寺村幸雄、昼田理江

キャラバンの大きな恵みは、小林先生ご夫妻、教会の皆様と共に家族のように歩めたことでした。具体的には、英会話クラスのチャペルタイムでのメッセージ、主日礼拝後の午後に 2 年ぶりに行われた子どものための夏祭り、英会話クラスのチラシ配布のご奉仕などです。

奈良福音自由教会の特徴の一つは、交わりの多さです。昨年度は、その交わりの機会がコロナの影響で全て中止となりました。そのような中でしたが、キャラバンチームを受け入れてくださり、緊急事態宣言の解除もあって、夏祭りの計画を進めることができました。この開催は教会全体の喜びでありました。この喜びに私たちも参加する恵みを受けました。神様は、制限がある中でしたが 17 名の子どもを送ってくださいました。福音が伝えられ、子供たちと大人が一緒に遊ぶ、楽しい時となりました。

神様が、テーマ聖句によって導かれた日々としてくださり、感謝します。

❷

❶ 日本福音キリスト教会連合 八王子キリスト福音教会（東京都）

7月22日(木)–7月28日(水)　菅野雪、入月かおる、石橋美由紀

私たちのチームは、子どもお楽しみ会やCSでの奉仕、主日礼拝、祈祷会、青年会さらに音楽伝道の機会が与えられました。

特に、メンバーの石橋姉によるヴァイオリン演奏が用いられました。教会員の方が、伝道の思いを持って運営されているCafé でミニライブを行いました。２回の公演が行われ、Café の常連さんや初めての方など総勢８名の方が聴いてくださいました。Amazing Grace を始め５曲ほどの演奏に、涙して喜んでくださった方もいました。その中から、次の日の祈祷会に出席してくださった方も起こされ感謝でした。

また、最終日に「キャラバン自体は一週間でしたが、以前からずっと祈ってきたので、初めて会ったような気がしませんでした。寂しいです」と仰ってくださった方がおられました。キャラバン伝道は私たちの働き以上に、教会の働きとして祈りの中で建てあげられてきたことを教えられました。先生ご夫妻をはじめ、地域の方々との交わり、青年たち、教会員の方々を通して、主の御業を見せていただきました。感謝いたします。

❸ 保守バプテスト同盟 西多摩バプテスト教会（東京都）

7月11日(日)–18日(日)　大橋歩、阿部祐、竹内基喜

今回のキャラバンはコロナ禍の中でしたが、礼拝の中で証、教会学校、説教の奉仕、平日はトラクト配布や、祈祷会、バイブルスタディ、子ども集会、除草作業…と、充実した奉仕をすることができました。これらの奉仕を通して、テーマ聖句の「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい」を改めて覚えさせられる時となりました。教会の方との礼拝後の交わりや、バイブルスタディでの交わりを通して、コロナ禍での悩みや苦しみをお伺いしたり、久しぶりの交わりへの喜びを共に喜ぶことができました。

また、チームとして一緒に奉仕していく中で互いの理解が深まり、同労者と共に奉仕する喜びも覚えることができました。今回は宣教会から通いという特殊な形でのキャラバンでしたが、毎日宣教会に戻って来ることで背後にある祈りを身近に感じさせられました。

キャラバンを受け入れてくださった教会の方々、背後の祈りに感謝します。

04 夏期研修講座
Summer Study Lectures

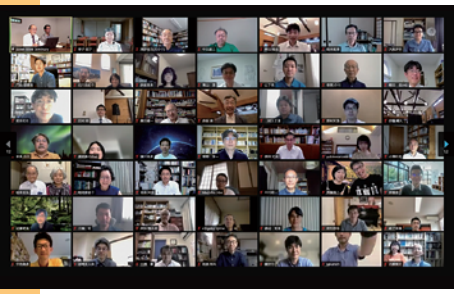
夏期研修講座の報告

伊藤 暢人
Nobuhito Ito
聖書神学舎教務主任
永福南キリスト教会牧師

昨年はコロナ禍のために中止にした夏期研修講座でしたが、今年はオンライン講座というかたちで開催することができました。申込アカウント数は 54、うち 11 は夫婦参加だったので 65 名（当日欠席で録画利用の人を含む）が、全国津々浦々から「集まり」ました。

今年は津村俊夫先生を講師に迎え、「ヘブル詩の文法― ハバクク書 3 章の並行法とその意味について考える」と題して、5 回計 10 時間の講義をしていただきました。前半に並行法の定義や形式を確認し、またしばしば並行法を理解する鍵となる垂直文法（vertical grammar）について多くの実例から考え、後半はそれらを生かしてハバクク書 3 章を実際に読み解いていく学びでした。地道にみことばに向かい、釈義し、説き明かしていくことへのチャレンジと刺激を受ける機会となりました。

顔と顔を合わせての交わりができないのは残念ですが、参加のしやすさや、あとで録画を利用できるなどオンラインならではのメリットもありました。また、会場となった奥多摩福音の家スタッフやオンライン配信に詳しい卒業生の尽力によって、見やすく聞きやすい画質・音質に仕上がったことも、主の恵みと覚えて感謝します。



夏期研修講座に参加して

輪田 豊
Yutaka Wada
北信太聖書教会牧師

聖書宣教会で聖書言語を教えて頂いたにも関わらず、忙しさを理由に聖書原典の学びが継続できない現状に、もどかしさを感じています。関西・中四国の同窓会に参加し、原典ならではの奥深さに触れて、その時は学びに向かうモチベーションが出ます。しかし一ヶ月もすれば元通り…。繰り返し挫折するような不真面目な私ですが、しかしあきらめきれません。『独学大全』（2020 年、ダイヤモンド社）を参考にしつつ、また学びを再開していました。その折に夏期研修講座が zoom で開催される旨の案内が届きました。大阪在住の私にとっては、まさに天からの助けです。

津村先生の 50 年間の集大成としての講義ということもあり、期待以上の素晴らしさに感謝いたします。講義の内容は、釈義のために購入した書籍からは得られない新しい知見に富んでいました。講義の質問はチャットで行われました。質問内容を文字にする手間はありましたが、それゆえに質問の整理ができ良かったと思います。

おそらく一ヶ月もすれば聖書原典の学びに挫折すると思います。でも性懲りもなく立ち上がり、また挫折する。これを繰り返しつつ、あきらめず、もがき続けたい。それだけの価値があることを夏期研修講座を通して再発見しました。

最後になりましたが、綺麗な画像とクリアーな音を提供してくださった技術スタッフの方々にも感謝いたします。

教会音楽夏期講習会報告

矢吹 綾子
Ayako Yabuki
聖書神学舎 教師

8月19日、20日の2日間、オンラインによる講習会を開催し、初めての受講者11名を含む30名の受講者が与えられ、聖書宣教会を会場にした場合には参加できなかったかもしれない方々にも学びの機会を提供できたことを感謝しています。

講義Ⅰ「礼拝について」と講義Ⅱ「教理・教会論」では、礼拝における奉仕のあり方を聖書から学び、講義と演習Ⅰ「礼拝における賛美」と講義と演習Ⅱ「礼拝奏楽」では、Zoomシステムの音質の問題を憂慮して事前に録画したものを画面共有し、賛美の実践を学びました。分科会は、聖書宣教会に来ていただいて行うことも考えましたが、新型コロナウイルスの感染予防の観点から、オルガン、ピアノ、歌唱法、聖歌隊指導法の分科会すべてを、オンラインによる個人レッスンという形で行いました。実際、東京都の緊急事態宣言下での講習会となりましたので、対面で分科会を行うことは難しかったと思っています。

残念ながら、対面で行う時と同じような臨場感はありませんでしたが、Zoomシステムは双方向のコミュニケーションが可能なので、質疑応答の時には、ともに学んでいることを実感することができました。

受講者の方々が、2日間の学びを通して受けた恵みを礼拝の賛美のために活かし、今回の学びが主によって諸教会の益とされますようにと祈ります。

教会音楽夏期講習会に参加して

中山 和子
Kazuko Nakayama
菅生キリスト教会

今年の夏期講習会は、ズームならではの良かった所がたくさんありました。ズームを通しての音楽は伝わるのだろうかと少し心配もありましたが、先生方の細心の準備と録画などですべてがスムーズでした。講義の中での楽譜の用意とともに、歌やオルガンで先生方の実演が丁寧になされて、普段の講習会より分かりやすく身近に捉えることができました。

特に私の印象に残ったことですが、コラール前奏曲のアナリーゼがとても分かりやすく、その後の演奏では、チャペルのオルガンが遺憾無く力を発揮し、アナリーゼに基づいてどのように演奏したら良いのか良く分かりました。ただパイプオルガンがあれば良いという事ではなく、どのように弾くのか、どのように響かせるのか、改めて教えられました。

分科会ではオルガンレッスンを受けました。細やかなタッチのご指導については充分に理解できたわけではないのですが、楽曲の特徴、音型の意味や弾き方、声部の歌い方、つなげ方など、大変充実した貴重な30分をいただきました。

講義の間に質疑応答の時間も用意されました。参加者全員のお顔を見ながら、貴重な質問が出されて、キリスト者として社会的関心を持って世に関わっていくことをも皆で共有することができたと思います。

今回の夏期講習会のために多くの知恵と力を注いで準備してくださった先生方に心より感謝申し上げます。

聖書宣教会通信 No.185 発行者：鳥居 完次 〒205-0017 東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel 042-554-1710 Fax 042-554-5562 http://www.bibleseminary.jp/ 振替 00150-6-34971（聖書宣教会）

図書館から - 図書館今昔 -

鞭木 由行
Yoshiyuki Muchiki
聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

その昔、浜田山校舎の卒業生はご存知のことですが、JBS には図書館どころか図書室もありませんでした。あるのは本棚が数カ所に設置されているだけで、蔵書の多くは諸先生からの献本でした。そこで卒論を書くためには、夏休みを利用して何度か東神大の図書館へ出向いていって、Elenchus を借りて朝から晩まで文献を探し続けました。そして、関連する論文や書籍を見つけると、それを図書館から借りてコピーを取るのですが、東神大の図書館であっても入手できないことがしばしばでした。しかし、今卒論を書くために東神大の図書館へ行く学生は殆どいませんん。それだけ JBS の図書館が充実してきたのだといえば、確かにあの頃に比べると格段の違いがあります。何よりも「図書館」があります（「図書室」ですが「図書館長」がいるので図書館？！）。これは図書館の充実のために諸教会からささげられた貴重な献金の中から、毎年図書費として一定の額を予算に計上し続けてきた結果です。それだけでなく、今はネットをとおして多くの貴重な文献にアクセスすることができるようになったのも大きいでしょう。しかし、図書館の充実はまだこれからです。私には丘の頂上に立つゴードン・コンウェル神学校の図書館が懐かしく思い出されます。朝早くから夜遅くまで入館ができ、その広い地下書庫には学術雑誌がところ狭しと並んでいました。図書館の充実には長い時間が必要です。

聖書宣教会からのお知らせ
Information

「オープンデイ」のお知らせ
11月6日（土）

オープン・デイは、授業や礼拝に出席いただける「公開授業」の日です。今年もオンラインでの公開を予定しています。時期が近づいたら聖書宣教会のWEBサイトでご案内いたします。入会を検討している方に限り、訪問・見学可能（要予約）です
(時間割は、当日変更となる場合もあります。)

	I～II 8:20～10:00	10:10～10:40	III～IV 10:50～12:30
1年	ヘブル語（伊藤 暢人）	チャペル（三浦 譲）	旧約各書I（III限）（伊藤 暢人） 賛美歌学（IV限）（赤坂 恵美）
2年	新約釈義II（横山 昌英）		組織神学IV（キリスト論）（赤坂 泉）
3年	新約神学（三浦 譲）		旧約釈義III（鞭木 由行）
4年	―		旧約釈義IV（鞭木 由行）
	牧会学V（II限）（牧会の諸問題）（鞭木 由行）		

オンライン公開予定

「賛美礼拝」のお知らせ
11月27日（土）

「全地よ、主の御前に静まれ」

聖書：ハバクク書 2章 9~20節
説教：若井 和生
（聖書神学舎教師、飯能キリスト聖園教会 牧師）

今年もオンライン配信を用いた礼拝を予定しています。時期が近づいたら聖書宣教会のWEBサイトでご案内いたします。